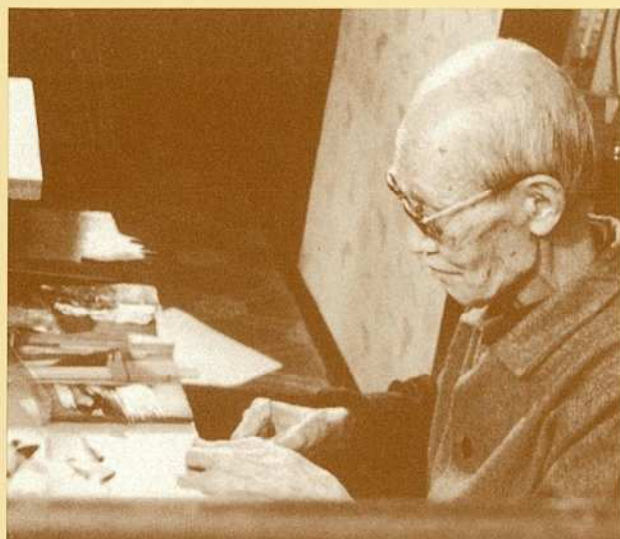


伝統に生きる

—あらかわの工芸技術—



日本画用筆

入山初太郎

(昭和61年度作品)

16mm映画・ビデオ
カラー・16分

プロフィール

住所、荒川区荒川4-32-2

明治36年(1905)、東京生まれ

昭和59年度荒川区指定無形文化財保持者に認定。

入山さんは、荒川で150年に及ぶ筆づくりをしてきた職人の家に生まれ、その5代目として仕事に励んでいます。

第一峽田小学校卒業後、父・4代目正吉さんについて、基礎的な作業である軸けずりから始め、筆づくりの技術を修得しました。筆の穂を束ねる「毛組み」の作業にはコツがあって根気がいります。仕事場の脇に「根気・何事も根気」と書いた札が貼ってあるのも、このためでしょう。

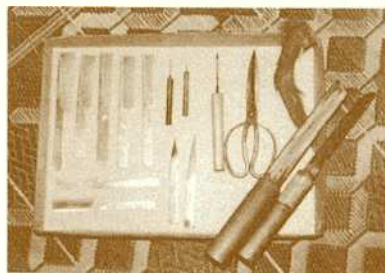
入山さんの筆は、日本美術院の奥村土牛・平山郁夫・羽石光志各画伯をはじめ、多くの画家に愛用され、日光東照宮陽明門の天井板絵の竜・薬師寺金堂天井絵・高松塚古墳壁画の復元模写などを生み出しました。入山さんの作った筆で、こんなよい絵が描けたという愛用者からの言葉が、入山さんを筆づくりに向かわせる原動力になっているようです。

現在、荒川区伝統工芸技術保存会の副会長。

企画 東京都荒川区教育委員会・製作 毎日映画社

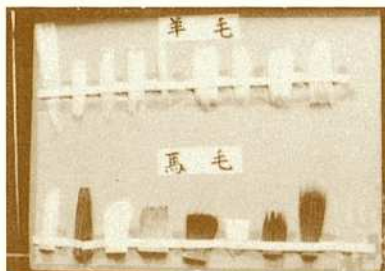
用具・工具

櫛（粗・細）、寄せ板・寄せ金（毛をまとめるのに使用）、切り出し、くりばん、きり、はんさし、鋏、かんな、鋸、焼きゴテ、原毛（羊毛・タヌキ・馬の腹と尾・鹿など）、麻糸など。

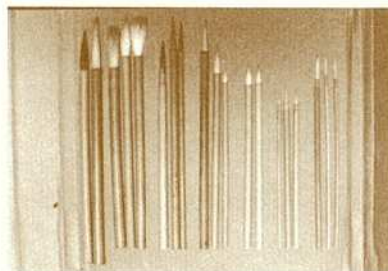


工程—つけたて筆の場合—

- (1)毛をぬいてひもでゆわえ、手ぬぐいでくるんでゆで、クセをとる。
- (2)天日でほす。
- (3)「毛もみ」——もみがらの灰でもみ、油ぬきをする。
- (4)油ぬきした原毛を大・中・小の長さに分ける。
- (5)櫛で毛をすく。綿毛が櫛につき、長い毛だけが残る。
- (6)毛を寄せる——毛を手のにせ、寄せ板で一方をたたき、毛先をそろえる。
- (7)はんさしで、その都度悪い毛を取り除き、良い毛だけを残していく。
- (8)毛を水で固める。
- (9)「毛組み」——職人の言葉で「先をぞべにする」という。
筆先の芯柱となる命毛よりわずかばかり短目に、心柱になる命毛を包み込むようにして、やや硬めの毛をまきつける。
のど下の毛を取りつける。
命毛に対してどの位の間隔を取るかは、まったくのカンによる。
腰と呼ばれる部分の毛を全体の調和を計りながら取りつける。
- (10)「切りませ」——毛組みした毛をませあわせる作業。
毛組みしたものを、のばし、たたみ、そろえる、こうした作業を十数回くり返し完全にませあわせる。
硬さの異なる毛を、長さを変えて組み合わせる。混ぜ合せが十分でないと筆先が割れたり、かすれたりする。
- (11)筆1本の量に分ける。
- (12)真立て筒に入れる。
たたきながら毛と毛をなじませる。
- (13)上毛かけ——上毛は、筆穂の外を覆う毛のこと。
必要な量の上毛を、櫛ですきならして、すだれ状に並べる。
真立てした筆穂に湿りを加え、上毛を筆穂の外側を包むようにして巻きつける。
- (14)「糸締め」——筆穂の根元を麻糸を使い強く結ぶ。
- (15)筆穂の下の部分に松ヤニを塗りつけ、焼きゴテで焼き込む。
- (16)筆の軸をくり、筆穂がすげ込みやすくする。
- (17)筆にふのりをつけ、麻糸でしごく。



(筆の材料)



(各種の筆)

利用される方は…………… ☎ **3891-4349**

この記録〈16ミリ映画〉、〈ビデオテープ〉は、荒川区立荒川図書館で貸し出しています。
貸し出し期間は、1回5日間です。お気軽にご利用ください。

※16ミリ映画は、団体登録と16ミリ映写機講習修了者が操作することが必要です。